

平成 30 年度第 1 学期 入学者の集い

所長祝辞

ご紹介いただきました、本学習センター所長の林です。

まず最初に、放送大学に入学され、そして本学習センターを拠点としてこれから学び始めるみなさんに対し、心よりの歓迎の意を表したいと思います。

と申しましたが、私自身も、実はみなさんと同じく、この4月から新たにこの学習センターに参りました。そのようなわけで、特に今年入学されたみなさんとは、ある意味で同期生であり、特別な親近感を感じています。

そんな「新米所長」ですから、いろいろと至らない点があると思います。なるべく早く一人前になるよう努力いたしますが、勝手なお願いで恐縮ですが、少しの間、暖かく見守っていただければ幸いです。

私は、本学習センターに来る前は東京大学文学部で言語学を教えていました。言語学というのは、あまり知られていませんが、実は、カバーする領域が意外に広い研究分野です。従って、いろいろなタイプの研究者がいます。しかし、ひとつ共通する特徴として、ついつい言葉自体が気になってしまうという習性（あるいは職業病）が身につけてしまっているという点をあげることができるかもしれません。

そんなわけで、私には「放送大学」の名前が少し気になりました。といっても日本語の「放送大学」ではなくて、英語の名称の The Open University of Japan についてです。なぜならば、「放送」の訳語としては、broadcast（ブロードキャスト）とか air（エア）というような単語が思い浮かんだからです。

そこで放送大学のウェブサイト調べてみました。日本語のサイトにはこのことについて何も情報がなかったのですが、放送大学の英語のサイトを見たところ、放送大学の設置に先立って放送大学学園が設立された1981年の時点では、英語名称は The Open University of Japan ではなく、The University of the Air であったことがわかりました。

ご存知のとおり、air という単語は「放送中」を表す on air（オン・エア）という表現からもわかるように、「放送」という意味を持っていますし、動詞 to air は「放送する」という意味で使われます。したがって、The University of the Air という名称は「放送大学」の英語名称として、きわめて妥当なものです。

しかし、放送大学の英語版ウェブサイトの情報によれば、2007年10月に、The University of the Air という名称から現在の The Open University of Japan に改称されたとのことでした。

なぜこのような名称の変更がおこなわれたのか、本来ならば、当時この名称変更に関わった方々にインタビューして確かめるべきですが、今回は私の推測をお話しすることをお許してください。

これもご存知のことと思いますが、放送大学は放送を媒体として高等教育をおこなっていると同時に、全国に50箇所ある学習センターにおける面接授業を通じても教育をおこなっています。確かに、この大学が他の大学と大きく違う特徴として「放送」を使うという点があります。しかし、もっと重要かつ根本的な違いは、どんな方にも開かれた大学であるということです。お仕事を持っている方、子育てあるいは介護のため長くキャンパスにいられない方、障害があるため毎日の通学が無理な方、あるいは、自分のペースでゆっくり学びたい方など、他の大学では学ぶことが難しい方々にも門戸を開いています。この意味で、他の大学が、入学要件を満たした人だけを受け入れる、いわば closed な（閉ざされた）大学であるとすれば、放送大学を The Open University（開かれた大学）と呼ぶことは、非常に理にかなっていると思います。

ところで、英語の定冠詞 the にはいろいろな用法がありますが、そのなかに、指し示す対象がたったひとつであることを表す用法があります。the earth（地球）とか the sun（太陽）とか the morning star（明けの明星）とか、惑星の名前に付けられる the がその典型例です。わざわざ The Open University of Japan と定冠詞をつけたのは、命名した人の「日本で唯一の開かれた大学」という思いが反映しているように思われます。

Open な、つまり「開かれた」という特徴は、授業の受け方（履修の仕方）についても言えると思います。私が3月まで働いていた東京大学文学部には26の専修課程と呼ばれるコースがあり、学生が受けなければならない授業は26のコースごとに違っていて、その中には必修科目という、それを取らなければ卒業できない授業も少なくありませんでした。私は言語学のコースの学生を教えていたわけですが、ほとんどの授業では言語学コースに所属する学生が大部分を占めていました。同じ学部には、哲学、倫理学、宗教学、印度哲学、イスラム学、考古学、日本史学、東洋史学、西洋史学、日本文学、中国文学、フランス文学、イタリア文学、心理学、社会学、社会心理学などなど、すぐにはすべてを列挙できないくらい多くのコースがあるのですが、他のコースの学生と接する機会は限られていました。つまり、いつも授業にはだいたい同じ学生が集まっていたわけです。

一方、放送大学は、学生数が9万人を超えるほどの大規模な大学にもかかわらず、学部は教養学部ひとつだけ、なんと学科も教養学科ひとつだけです。大学院もまた、1研究科で、文化科学研究科しかありません。確かに、教養学科の中には6つのコースがありますが、所属するコースの授業を34単位以上取れば、あとは自由に授業を受けることができます。つまり放送大学は、多くの

人々に「開かれた」大学であると同時に、学ぶテーマや学び方についても、非常に「開かれた」大学であるということが出来ます。

となると、さまざまな授業の選び方が可能になります。仮にこの学習センターに所属する学生の総数を6000名としてみましましょう。もしある授業に30名の学生が集まったとすると、そのような学生がたまたま集まる確率は、単純に計算すると、なんと「775兆のうしろに、さらにゼロが66個も並ぶ数」分の1になります。想像を絶する小さな確率ということになります。

放送授業と呼ばれる、放送を視聴する形式の授業では、学生同士の交流は不可能です。オンライン授業でも、学生同士の交流は、ネットを通じた限定的なものにならざるを得ません。しかし、本学習センターで実施される面接授業では、同じ授業をたまたま選んだ学生と直接会うことが出来ます。そして、そこに集まった学生は、さきほどもうしあげたような、ごくごく小さな確率で選ばれた人たちなのです。みなさんには、ぜひその機会を十分に活かしてほしいと思います。

授業は、教師が一方的に与えるものではありません。教師のリーダーシップのもとに、学生と教師がいっしょになって作り上げるものです。みなさんのひとつの質問が、みなさんのちょっとした反応が、あるいは、みなさんのかすかな微笑みさえもが、教師を刺激し、やる気にさせるかもしれないのです。ぜひ能動的に授業に取り組んでいただきたいと思います。

さて、ここまで放送大学のすぐれた点についてご紹介してきました。しかし、最後にやや残念な点に言及しなければなりません。というのも、今後少しずつではありますが、大学の経費を節約していかなければならないからです。学習センターのレベルでは、例えば、みなさんと日頃窓口で接する職員の数が減る可能性があります。現在、職員はぎりぎりの人数で毎日の業務をこなしているのです。本当のことを言えば、減らすどころか増やしてほしいのですが、まずはなんとか現状が維持されるように努力するしかありません。そのため、みなさんに多少のご不便をおかけすることもあるかと思いますが、ご理解をいただければたいへんありがたく存じます。

最後に、みなさんのこれからの放送大学での勉学が充実したものになること、そして多くの素晴らしい出会いが面接授業を通じて生まれることを祈りつつ、私からのお祝いのことばといたします。